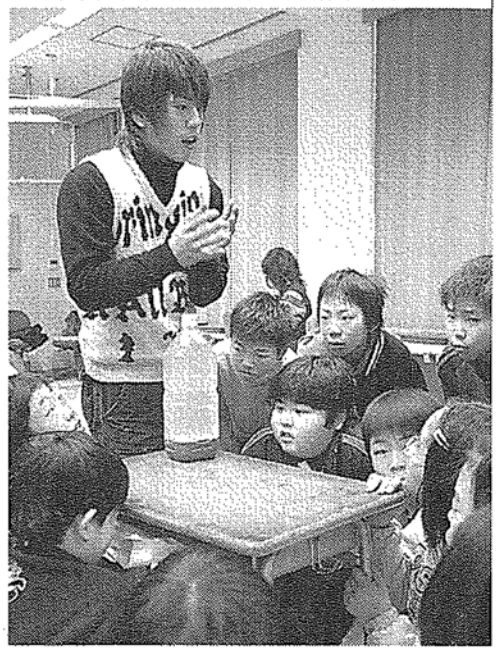
震災体験 次世代へ

生きた教科書に

大学生ら、きずな語り継ぐ



砂と水を詰めたペットボトルを使い、液状化現象を説明する神戸学院大生＝17日、兵庫県姫路市の市立旭陽小学校で

阪神大震災からまる11年を迎えた17日、被災地を中心に、子どもたちに体験を語り継ぐ授業があった。震災を記憶する児童・生徒が年々減り、教育現場での風化が心配される中、映像記録や体験談を通して次世代に教訓をつなぐ取り組みが広がっている。＝1面参照

神戸市中央区の市立渚中学校の授業では、震災で母親を亡くした卒業生の女子高生(16)が制作したインタビュービデオを使った。女子高生が祖父母に被災当時の状況を初めて尋ねる様子を映し出す。同中1年の山田花乃さん(13)は「震災を知ろうとする先輩の姿に共感を覚えた」と話した。

同中は98年春、復興住宅が立ち並ぶ一角に開校した。当時は生徒の大半が被災者だったが、今は約4割に。心のケア担当の井戸川京助教諭(48)は「以前なら生徒たちの精神的ショックを考え、体験談を紹介するのは控えたかもしれない」。

神戸市教委は、中学生用の防災学習の副読本「幸せ運ぼう」のDVD版を制作中だ。震災当時のニュースを中心に、新潟県中越地震、スマトラ沖地震なども収録し、120分にまとめる。これまでは被災した子どもが心的外傷後ストレス障害(PTSD)を起こすのを恐れ、生々しい資料は極力、使わなかった。「震災を知らない世代に被害の深刻さをわかってもらうには、映像が効果的」と期待する。

兵庫県姫路市の市立旭陽小学校は、17日の防災学習に神戸学院大生らでつくる「防災社会貢献ユニット」を招いた。メンバーの島本一志さん(19)は、水と砂を詰めたペットボトルで液状化現象の原理を5年生に説明した。神戸市内の自宅は瓦が落ち、外壁にひびが入った。「つらさの中から人と人とのきずなを学んだ。それを伝える生きた教科書になりたい」

県教委によると、県内で05年度に防災教育の年間指導計画を作ったのは、小学校で85・4%、中学校で79・8%。7年前に比べていずれも倍増した。保護者や卒業生の体験談を聞いたり、映像を見せたりするケースも増えている。

2006.1.18　毎日

今できることあすに備えて

2006.1.18

神戸（姫路版）

ペットボトルを使った液状化の実験に見入る児童ら＝姫路市網干区坂上、旭陽小

大学生が防災指導

姫路 旭陽小

姫路市立旭陽小学校で、神戸学院大一年生六人が防災教室を開いた。

六人は、同大で防災社会貢献ユニットコースを専攻している。全員、県立舞子高校（神戸市）環境防災科の一期生で、十一年前の震災を体験した。

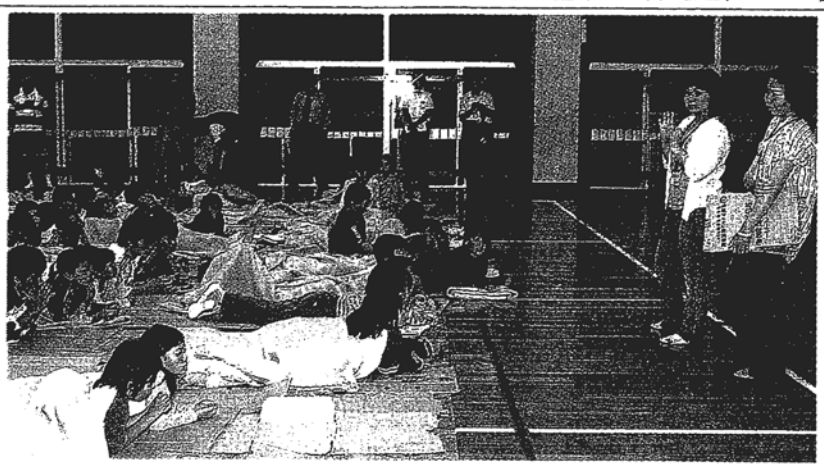
防災教室では、高学年約二百七十人に、山崎断層地震が起こった際の震度分布予想を示し、姫路でも震度6強になると説明。非常持ち出し袋や避難経路の確認など自主防災の大切さを訴えた。

砂と水が入ったペットボトルを使って、液状化の実験も行い、ビー玉を使って、地震の際にマンホールが浮き上がる現象を再現した。

同大の島本一志さん(19)は「これからも防災の大切さを教えていきたい」と話した。

（若林幹夫）

2006年(平成18年)6月21日(水曜日)



段ボールに寝そべり、学生の被災体験を聞く児童ら（姫路市立藤ノ木山野外活動センターで）

神院大生が防災授業

姫路で児童に震災体験語る

小学生の時に阪神大震災を経験した神戸学院大学（神戸市西区）の学生らが20日、姫路市立藤ノ木山野外活動センターで、同市立旭陽小5年生約100人に避難所体験などの「防災授業」を行った。児童たちは体育館に段ボールを敷いて横になり、固い床の上で寝るつらさを実感し、学生の体験談に耳を傾けた。

同小が泊まりがけで行う自然学習の一環。同小の呼びかけに、防災やボランティアについて学ぶ同大学の「学際教育機構防災・社会貢献ユニット」に所属する2年生7人が協力し、授業内容も考えた。

児童たちは昼間、応急手当の方法やロープの結び方などを学び、夕食後、体育館で避難所の雰囲気を体験。神戸市兵庫区で被災し、1週間、近くの小学校の教室で過ごした山本真巨(まみ)さん(19)は「早朝だったのでパジャマ姿で避難した。水が出ないのでトイレにも困った」などと語りかけた。児童たちは、非常持ち出し袋に何を入れておけば良いかなどを懸命に考えていた。

2006.6.21　読売

アイマスクを付けた同級生を誘導＝旭陽小学校

新教材で防災学習

神戸学院大生が開発指導

姫路・旭陽小

「防災」をテーマにした理科や社会などの教科学習が、姫路市立旭陽小学校（網干区坂上）であった。神戸学院大の「防災・社会貢献ユニット」に所属する学生が開発した教材で指導した。

防災教育を授業に日常的に取り入れてと、同ユニットの学生約二十人が中心に教材を作った。

国語、社会、理科、体育の四教科。理科はすごろく形式で、理科の知識とともに、備えておくべき非常食の量など防災の基礎について質問した。

体育では災害時の視覚障害者の誘導を体験。児童は机やいす、丸めた新聞紙を散乱させ、ひもを張り渡した教室内で、アイマスクを付けた同級生を安全に誘導する練習をした。

六年の仲前智美さん(一二)は「地震のとき、目の見えない人の不安さが分かった」と話した。希望する小学校には教材を送る。指導する学生の派遣も可。舩木さん☎078・974・1551

（神谷千晶）

2006.12.13　神戸

傷ついた人を支えられる人になりたい

震災の教訓 教材に生かす

神戸学院大の3人

舞子高校環境防災科では、3年生が卒業研究で自らの震災体験をつづり、「語り継ぐ」という冊子にまとめる。書くうちに記憶がよみがえり、震災の教訓を伝えることの大切さに改めて気づく生徒も多い。

いずれも神戸で被災した1期生の山本真巨(まみ)さん(20)、前田緑さん(20)、島本一志さん(20)もそうだった。そろって神戸学院大に進学。同大で06年度から始まったプログラム「防災・社会貢献ユニット」に参加し、防災教育の教材づくりに取り組んでいる。

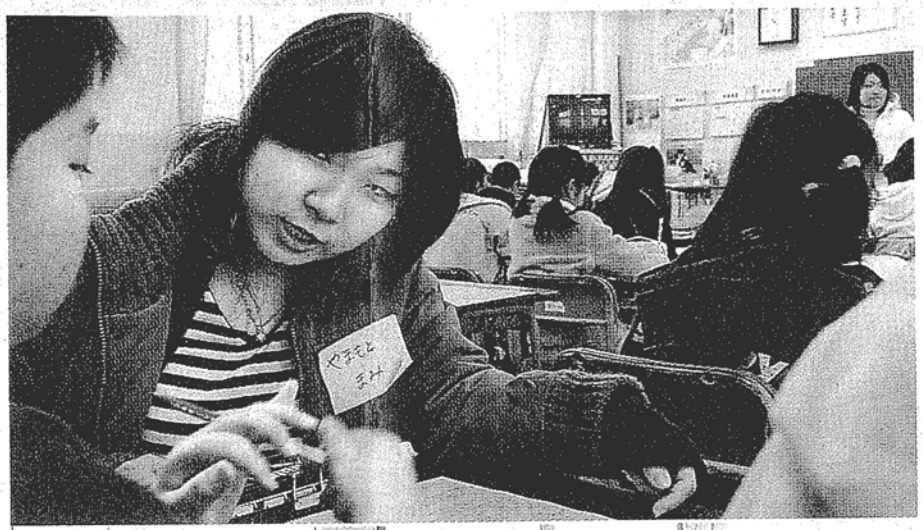
昨年12月7日、3人は仲間と一緒に兵庫県姫路市の市立旭陽小学校を訪ね、5年生と6年生の授業で先生役をした。

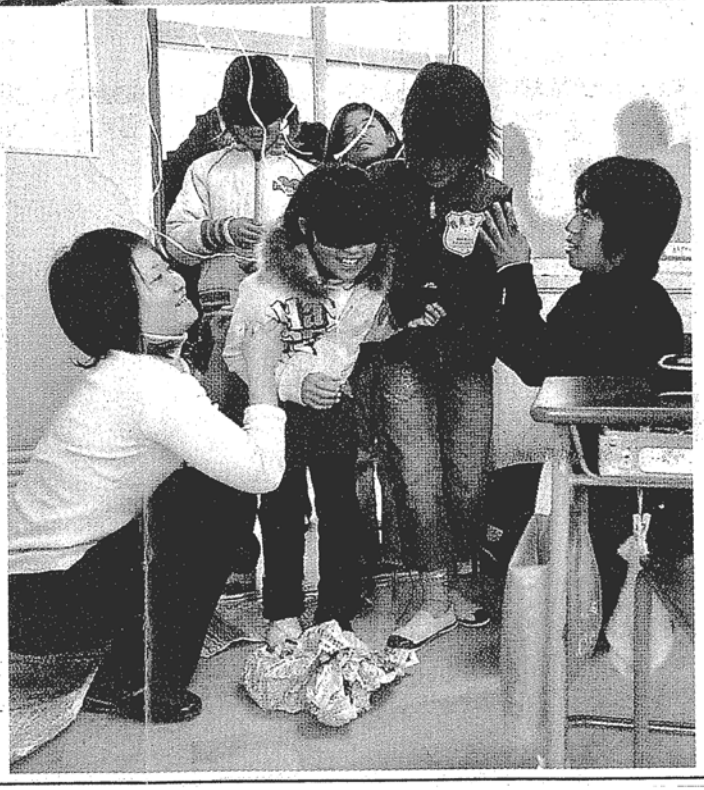
山本さんは国語の担当。震災の語り部の男性の話を自分でまとめた「こどもボランティア」という文を印刷して配った。小学校の避難所で、子どもたちがパンを配ったり、トイレ掃除をしたりしたという内容。読解力や漢字能力をはかる設問がついていて、防災と国語を同時に学べるようになっている。

前田さんと島本さんは体育。子どもたちに、災害時に視覚障害者がどんな状況で避難するかを疑似体験してもらった。児童は2人1組になり、1人がアイマスクをつけ、もう1人が手を引いて、机やいすの障害物を置いた教室内を移動した。

「段差に注意して」「目の見えない人に周囲の状況を説明してあげてね」。子どもたちに丁寧にアドバイスする。

前田さんは言う。「震災をきっかけにできた環境防災科の卒業生として、これからも防災の大切さを発信し、一人でも多くの命を守りたい」





上震災時の「こどもボランティア」を題材にした教材で国語の授業をする山本真巨さん下防災の体験学習授業をする前田緑さん（左）と島本一志さん（右）。障害物を準備した教室を災害現場に見立て、アイマスクをした視覚障害者役の児童を誘導する＝いずれも兵庫県姫路市の市立旭陽小学校で